

小児期に多いCommon diseaseに関する研究 平成6年度総括研究報告

分担研究者 五十嵐正紘

要約：小児に多いCommon disease(ありふれた病気)の予防,治療,対処・養生法の多くがその妥当性や有効性が科学的に解明されないまま行われている。ここに実証的なメスを入れるのが本研究の目的である。本研究班では、「かぜ」を取り上げ,保護者がどのような対処・養生法を行っているか調査した。その中から解明の優先度の高いものとして,かぜの時の入浴の可否について,保護者および医師の意識調査,および,臨床パイロット調査を行った。また,パイロット調査の結果をうけ,本調査および解熱剤の使用の可否のパイロット調査を行う。

見出し語：Common disease, ありふれた病気, かぜ, 入浴, 養生法, 対処法, 解熱剤, 臨床試験

研究組織：

分担研究者：五十嵐正紘(自治医科大学地域医療学)

研究協力者：武谷 茂(たけや小児科医院)

山中 龍宏(焼津市立総合病院)

絹巻 宏(絹巻医院)

崎山 弘(崎山小児科)

芦田 乃介(公立浜坂病院)

岡山 雅信(公立浜坂病院)

アンケート調査を実施した。その結果,前者では,「うがいをする」,「入浴をしない」,後者では,「坐薬・解熱剤を使用する」,「入浴しない」といった項目が上位の回答にみられた。この中で,調査した範囲内では,「入浴をしない」に対し,科学的根拠を示した論文は見当たらなかったことから,かぜと入浴について,先ず調査を行うことにした。

子どもがかぜの時の入浴に関する意識調査を保護者および医師に行ったところ,保護者の54.0%が入浴をさせており,また医師の88.5%が入浴を許可していた。しかし,医師については,ほとんどが条件付きで入浴を認めており,発熱,全身状態,咳嗽の程度を条件として上げていた。

かぜの諸症状に対する入浴の影響を,パイロット調査を行った結果,若干の方法論の再検討は必要ながら,影響しないという推測を得た。これは,従来の慣行に対し,疑問を提示し,重要な結論と考えられる。

研究目標

1. 病気対処法,健康法,育児法について,その妥当性が未解明の事項は何があるのか。
2. 解明の必要性の高い幾つかの事項につき,対処の現状は,今までの解明の成果は。
3. かぜ罹患中,入浴しないことが,かぜの治療上意味があるか。
4. 発熱時の解熱は,治療上有益であるか。
5. かぜの時の抗生剤物質の投与の是非はどうか。

研究結果

小児に多いCommon diseaseの中で,「かぜ」を取り上げ,その予防,治療,対処・養生法の妥当性や有効性について調査を行うことにした。

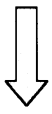
かぜおよび発熱の対処・養生法の保護者に対する

今後の方針および課題

Common diseaseに対し,根拠のある予防,治療,対処・養生法の確立を目指す。

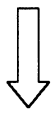
今後,かぜに与える入浴の影響を本調査し,入浴の可否に関する種々の影響因子の分析を行うと共に,解熱剤や抗生剤に対しても,パイロット調査を行う。

自治医科大学地域医療学



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:小児に多い Common disease(ありふれた病気)の予防,治療,対処・養生法の多くがその妥当性や有効性が科学的に解明されないまま行われている.ここに実証的なメスを入れるのが本研究の目的である.本研究班では,「かぜ」を取り上げ,保護者がどのような対処・養生法を行っているか調査した.その中から解明の優先度の高いものとして,かぜの時の入浴の可否をについて,保護者および医師の意識調査,および,臨床パイロット調査を行った.また,パイロット調査の結果をうけ,本調査および解熱剤の使用の可否のパイロット調査を行う.